HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | ランドスケープデザインにおけるディズニーランダゼーションの構築 |
| Author(s) | 片桐, 保昭 |
| Citation | 科学技術社会論学会 第5回 年次研究大会・総会予稿集, 111-112 |
| Issue Date | 2006 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/28002 |
| Type | proceedings |
| Note | 科学技術社会論学会 第5回 年次研究大会・総会 |
| File Information | kagaku5.pdf |

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# ランドスケープデザインにおけるディズニーランダゼーションの構築

片桐保昭（北海道大学大学院文学研究科　博士課程）

## はじめに

日本の公共事業において、ランドスケープデザインは公園緑地、街路、橋梁、河川敷、公共建築といった施設を設計する分野で、風景全体の美質を向上させる意味が込められており、近代科学によってつくられた建築土木意匠の画一性への反省からこの分野の必要性が叫ばれている。

北海道のこの都市では、観光振興のため、町全体の建築物をチロル地方の意匠に変えようとしている。

しかし逆に公共建造物に奇妙な形態のものが多くつくられることがディズニーランダゼーション(中川 1997）[1)]と呼ばれ、問題にされることがある。どこが奇妙なのか、なぜ奇妙なのか、なぜそうなるのだろうか。この意匠を客観的に評価することは困難である。

発表者は北海道において現在に至るまで通算14年間、ランドスケープデザイン業務に取り組んでおり、この経験と当事者たちへの聞き取りからディズニーランダゼーションがいかに構築されるかまとめ、考察する。

## ランドスケープデザインにおける意匠決定の図式

ランドスケープデザインの方向性は、地域住民にとっての利便という観点から、国土交通省や地方自治体によって定められてきている。これら施設の意匠の決定にあたっては、行政が定めた方向性に沿って計画され、設計作業は設計会社の専門家に依託されることが多い。このとき地域住民はその地域の視点から独自の要望を出し、「施設」の意匠が決定されることが望ましい。行政側の専門家が計画及び住民との調整作業を行い、施設形態の意匠は設計を依託されたデザイナーが、行政と住民双方の主張を取り入れて行う。これによって画一性が避けられ、地域の独自性が反映された意匠が行われる。以上がランドスケープデザインにおける意匠の決定過程の一般的な図式である。

## ディズニーランダゼーションという「実践」

しかし人々は各々、立場によって異なる動機からこの過程に参与する。地域住民は自らの利便より地域振興の視点からの意匠を望む。地域住民は自身の主体的な要望を主張するのではなく、外部の人間が想起するであろう地域イメージを想定し、そのイメージの実現を望むのである。

---

[1)] この奇妙な意匠がつくりだす景観は他にも、サブトピア(レルフ 1991, 76)、テクノバーブ(Smith 1992 )など様々に呼ばれている。

**またデザイナーは、望まれるであろうイメージを予想し、既存の事例に類似した意匠を提示しようとする（突飛な意匠は納得させるのが困難である）。**

**行政担当者は行政の定めた方向性から逸脱しないように気を使いつつ、地域住民の要望を取り入れる。様々な制約から住民の要望が実現できない場合、住民の意識を洞察し、代わりの選択肢を用意する作業も行う。**

**つまり独自の要望を期待されている住民は、自分たちの要望より、自分たちが想像する他者の要望を意匠に反映させたがるのである。この結果、住民の誰にとっても最もわかりやすい、また行政側としても報告書において平易に説明しやすい、子供が喜びそうなモノや地域を代表するモノ、あるいは大都市や外国の景観をモチーフとした意匠が歓迎される。ここに「公的な」価値観に沿った意匠イメージが構築され、地域住民の要望と公共事業における、近代性と行政と地域受益の一貫性は、このような意匠において確保されることになる。**

## 考察

**なぜ「公的な」価値観を反映しているはずの意匠が逆に珍奇な印象を与えるであろうか。公共事業のなかで対象化された「地域住民」が抱く価値観はすでに行政の言葉に翻訳された「公的な」ものであり、往々にしてそれはゆえに、住民ひとりひとりが主体的に抱くイメージが抑圧され、住民集会などでは発言しがたい雰囲気がある。これは珍妙さへの違和感として「公的な」あるいは「モダンな」文脈では対象化されない。**

**ディズニーランダゼーションと呼ばれるような違和感が感じられるのは、「公的な」文脈では対象化する必要もないような暗黙の共通認識を、視覚的なイメージとして抱いているからこそであろう。この視覚イメージにおける「暗黙の共通認識」はランドスケープデザインに関連する学会や業界が「風土」「文化」などの概念をもって意匠のモチーフとして活用しようとしているものに他ならない。が、公共事業における科学技術で対象化された途端、それは明確なモチーフが「必須通過点」となって独り歩きをはじめ、わかりやすく肥大化させた意匠として拡大「再生産」されてしまう。この場合の「わかりやすさ」は各人に内在している「風土」「文化」に由来する形態ではなく、その外に存在している基準である。**

**公共事業におけるインフラストラクチャー整備は「科学技術」に基礎を置いており、必然的に暗黙の認識領域である「風土」「文化」など、言葉で説明される以前のイメージを扱いにくい。この両者は言葉で説明される以前のイメージの段階で「分断」しているのである。**

**もしランドスケープデザインがその意匠の珍奇さにおいて揶揄の対象となるのなら、このことは主体に内在する、形態イメージを受容する枠組みとしての「文化」に基礎を置いた上で「公的な」価値観が構築されていないということに起因するといえるであろう。**

## 参考文献

中川理 1997：『異装するニッポン』彰国社.

レルフ, エドワード　1991：高野岳彦ほか訳『場所の現象学』筑摩書房.

Smith, Neil　1992：“New City, New Frontier,”　Sorkin, M.(eds.) *Variations on a Theme Park*, Hill and Wang, 61-93.